

続 学校点描

ようやく春の訪れを感じ始めたときに再び寒波の襲来です。気温も心も緩急をつけながら春に向かいます。

《M中学校》

NO.19

R7. 2. 18

担当：校長

2月1日（土）にバスケットボールM上地区冬季中大会が行われ、M中男子が優勝、女子が第3位に輝きました。この勢いを新年度にも繋げてほしいです。

2月17日（月）付けのY新聞に掲載されましたが、第4回UJフレッシュボクシング大会に東北予選会男子54キ級で見事優勝した、K・Sさんが山形県代表として出場します。大会は大阪府大津市で3/25～29に開催されます。中学生になって以来、東北では無敗を誇るSさんが全国に挑みます。

点描の精神

2月10日に、外部から講師をお招きして、今年最後の授業研究会を行いました。3年C組は『道徳』の授業研究です。担任の石岡先生が選んだのは、道徳の教科書の中にある『亡き母へのトランペット』という実話でした。

東日本大震災発生から1カ月後、津波に流された岩手県陸前高田市の自宅跡で、海に向かってトランペットを吹いていた少女がいました。場所は瓦礫で覆われた岩手県陸前高田市。津波に流された自宅跡に立ち、家族を奪った海に向かってトランペットを吹いた後、涙ぐむ17歳の少女の写真から、世の中の人々、家族を失った子どもの存在を知らされたのです。

この写真は、朝日新聞の記事と一緒に掲載されたものです。少女は、津波で母と祖母を亡くし、祖父は行方不明のまま。「私は元気だから、心配しないで」と、そんな思いでZARD（ザード）の「負けないで」と「故郷（ふるさと）」を吹いていたそうです。

涙を拭きながら、祖母が買ってくれたトランペットを抱きしめている1枚の写真。地震発生の際は、学校の部活の吹奏楽部で練習をしていた彼女。大きな揺れの後、母親に急いで電話したら「あなたはそこにいなさい。」それが最後の母親の言葉だったと話します。



この1枚の写真が、きっかけとなって、少女は東京オペラシティの舞台に立ちました。そして、聴衆約1500人を前に、あの日天国の母や家族に捧げた曲を再びトランペット演奏をしたのです。

あれから14年経ちました。家族を失ったとき、高校2年生だった彼女のその後の人生には、きっといろんなことがあったことでしょう。注目された分、辛い思いを抱えていたかもしれません。写真の彼女が前を向き、今も元気に夢に向かって歩んでいることを祈ります。



今年も7月に大雨災害があり、改めて気づかされました。電気がつくこと、ガスや水道が使えること、食べ物があること、家があること。これらは決して当たり前ではなく、いつ失うか分からないものです。そして、もっと大切なこと。家族や友人の存在も、永遠ではないということ。小さいころからいつも一緒だった関係も、時とともに変わっていくものです。受験制度も複雑になり、受験生としての意識が低いまま進路決定する中学生もいます。受験生としての時間には大いに意味があります。受験を終えた人も、これから受験に向かう人も人生の頑張りどころのタイミングは人それぞれなのです。

日常にある小さな出来事に目を向けてほしいという思いで、このたよりを綴ってきました。家族の日常にも、学校での生活の中にも、何気ない会話やふれあいの中に、かけがえのない瞬間があります。『点描の精神』とは、ふと流れすぎてしまうエピソードを堰止めすることなのかもしれません。

一貫して伝えたいことは、人間誰もが、決して一人ではないということです。

「寒いね」と話しかければ、「寒いね」と答える人のいるあたたかさ (俵 万智)

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。